メディア報道におけるインタラクションの分析

言語学においてインタラクションを分析する意義を求めて

多々良　直弘

はじめに

メディア報道の参与者たちは、単に情報を視聴者に提供しているのではなく、その文化において期待されているスタイルで談話を構成し、相互行為を行なっている。本発表では、メディア報道という制度的談話におけるインタラクションの分析を通じて、参与者たちが社会において共有されている枠組みや社会的規範に則って、適切な言語表現や定型表現、スタイルなどを選択しながら相互行為を行っていることを示した。メディア報道において繰り広げられる相互行為や言語行動が我々の日常生活における言語使用や社会における規範といかに関係しているのか、相互行為の中でいかに即興的かつ創発的に言語表現が産み出されていくのか、そして言語学の分野においてメディア報道におけるインタラクションを分析することがどのような意義を持っているのかなどの点を考察した。

スポーツ実況中継の先行研究

スポーツの実況中継という制度的談話では様々なジャンル独自の言語表現が使用されているが、近年ではオリンピック・パラリンピックなどの国際大会が世界各地で実況放送されており、同じ試合が通訳や翻訳を介さずにさまざまな言語で放送されているため、各言語で言語化される認知資源や好まれる言語表現、そして参与者間の相互行為の特徴を分析するための非常に良いデータである。実況中継の参与者たちは、流動的でシナリオのない試合を即興的に描写、解説することが求められる。どの文化でも視聴者が期待する適切な情報を伝達することが実況解説には求められるわけだが、出来事のどの部分を伝えるのか、それをどのように伝えるのかということに関して、各言語文化で違いが見られる。実況中継という制度的談話にも各言語文化の価値観や日常的な言語使用の規範が反映されており、参与者たちは単に情報を視聴者に提供するのではなく、その文化に適した形で談話を構成することが求められているのである。言い換えれば、実況中継の参与者たちは、目の前で起こっている出来事の全てを忠実にことばで描写、再現しているのではなく、ある特定の視点から言語化する認知資源を選択し、ある種の物語を作り上げているのである。日本語と英語による同じ試合の実況中継を比較すると、各言語の好まれる表現方法や相互行為の特徴が明らかになるだけでなく、文化によって注目され、言語化される対象の差異が観察されたり、同じ認知資源が異なる形で解釈されたりすることがあり、そこから各言語の背後にある文化的価値観が浮かび上がってくる。

スポーツの実況中継を分析した代表的な研究は、アメリカン・スポーツの実況中継のレジスターを分析した Ferguson(1983)とサッカーの実況中継のレジスターを分析した Beard(1998)が挙げられる。Ferguson (1983) はアメリカンスポーツの実況中継などで使用される定型表現（routines）に加えて、主語やコピュラの省略（[He] hit 307。/[It's a] fastball。/MaCatty [is] in difficulty。）、倒置の多用（Over the third is Murphy。）、for や to を使用した結果表現（Joe Roos's caught it for a touchdown。/There's a strike on the outside corner to make it 2 and 1。）、現在形や現在進行形の特徴的な使用方法などを挙げている。また Beard（1998）はサッカーの実況中継において観察される冠詞や動詞の省略、受動態や倒置の多用、ポーズ（間）の使用方法などの特徴を挙げ、実況中継のレジスターの慣習性を指摘している。

その他にも、英語とドイツ語の実況中継において使用される動詞の統語的、意味的特徴を分析し、両言語の類型論的な差異を考察している Krone(2005)、サッカーの実況解説と映像の関係を分析し、刻一刻と変化する状況において、コメンテーターたちがどのように実況と解説を行っているのか、マルチモーダルな分析を行っている Gerhardt(2008)などが挙げられる。また、多々良（2017a、2017b、2020）では日本語と英語のサッカーの実況中継を分析し、実況中継の参与者たちがどのような認知資源に注目し、目の前の出来事を言語化しているのか、実況中継がどのような文化的価値観に基づいて行われているのか、またどのように実況中継の談話を構成しているのかなどに関する分析をしている。

スポーツ実況中継におけるインタラクションを分析することで見えてくること

本発表では、前節で紹介した先行研究をもとにサッカーの試合の日本語、英語、スペイン語による実況中継を比較対照し、実況中継のインタラクションにおける(1)英語の指示代名詞 this/that の使用方法、(2)各言語に

おける認知的傾向（分析的把握と包括的把握（Nisbett et al. 2001））、(3)繰り返し（repetitions）の特徴に焦点を当て分析をし、インタラクションにおける実際の言語使用を分析することで見えてくる各言語の特徴と言語使用の規範について考察をした。

例えば(1)の実況中継のインタラクションにおける英語の指示代名詞 this と that の使用方法に関して、Beard（1998）は英語母語話者の直感に基づいて、英語の this は実際にプレーが行われている際に参与者たちが選手のプレーを描写する際に使用される一方、リプレイ映像を見ながら選手の動きに言及する際には that を使用することを指摘している。しかし、実際に実況中継のインタラクションにおける指示代名詞を動画とともに分析すると、Beard の指摘とは異なり、英語話者はこれから行う行為については this を使用する一方、既に終わった行為については "Oscar, Oscar. Another fabulous finish with the boy from Brazil and that should settle the issue in Chelsea's favor.（オスカル、オスカル、ブラジルからやってきた選手がまた素晴らしいゴールを決めました。これでチェルシーの勝利が決まったでしょう）" にあるように that（この場合はオスカルのゴールを指示している）を使用することが明らかになることを指摘した。この指示代名詞の使用方法は新村（2006）が指摘しているように、手に持っている読み終わった本を"That was a wonderful book!"と that で言及するのは、読み終わった瞬間に対象を時間的に「遠」として捉える意識を THAT で表すという指摘と合致しており、母語話者の直感ではなく、実際のやりとりを分析することの重要性を指摘した。

おわりに

本稿で考察したスポーツイベントを彩るスポーツ実況中継のレジスターでは、Ferguson（1983）や Crystal（2018）などが指摘しているように慣習的な言語表現が使用されているが、そのレジスターは我々の日常生活にも多くの影響を与えている。Ferguson（1983）はアメリカの子供たちがテレビやラジオを通じてメディアスポーツを楽しむと、アナウンサーの声を少し耳にしただけで、どのスポーツの実況中継かすぐにわかるようになると指摘している。また Hoyle（1993）は子供たちのスポーツ実況中継ごっこをフレームの変化の観点から分析し、子供たちがバスケットボールのテレビゲームをしている際にアナウンサーの視点で実況解説している姿から、子供たちが早い段階でスポーツ実況解説のレジスターを身につけていることを指摘している。Crystal（2019 : 412-413）は一人乗り二輪馬車競走（Sulky racing）などのスポーツ実況解説の特徴を説明しているが、実際の実況中継に加えてイギリスの子供が日常生活の中で友人と遊んでいる時も、自分たちの置かれている状況をスポーツアナウンサーの視点で実況中継をしている姿を紹介している。本発表で扱ったスポーツの実況中継における人々のインタラクションの分析も、これからさらに広がっていく分野であるだろう。

参考文献

Beard, Adrian. (1998). *The Language of Sport*. London, New York: Routledge.

Crystal, David (2019) *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.

Ferguson, Charles A (1983)"Sports Announce Talk: Syntactic aspects of register variation," *Language in Society* 12, 153-172.

Krone,M. (2005). *The Language of Football*. Stuttgart: ibidem-Verlag.

Hoyle, Susan (1993) "Participation Frameworks in Sportscasting Play: Imaginary and Literal Footings," *Framing in Discourse*, ed by Deborah Tannen, 114-115, Oxford University Press, New York.

Machi, Saeko (2020) ""Braid Structure" Conversations: Development of Informal Triadic Conversation in. Japanese," The Journal of Language in Society Vol. 22, No. 2. 15-29.

Nisbett, Richard E., Peng, Kaiping, Choi, Incheol, & Norenzayan, Ara. (2001) Culture and systems of thought: Holistic versus Analytic Cognition. *Psychological Review* 108 (2): pp.291-310.

野村佑子（2006）「語り手は何に注目するのか？－引用から見る日米語のナラティブ」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』13: pp. 83-93.

多々良直弘（2017a）「メディア報道における批判のディスコースースポーツ実況中継において日英語話者はどのように批判を展開するのかー」『社会言語科学』第 20 巻第 1 号, 71-83.

多々良直弘（2017b）「報道の社会言語学」井上逸兵編『朝倉日英対照言語学シリーズ発展編　社会言語学』61-81, 朝倉書店.

多々良直弘 (2020) 「フットボール実況中継の日英語比較」井出祥子・藤井陽子編著『シリーズ文化と言語使用 2　場とことばの諸相』131-154, ひつじ書房.